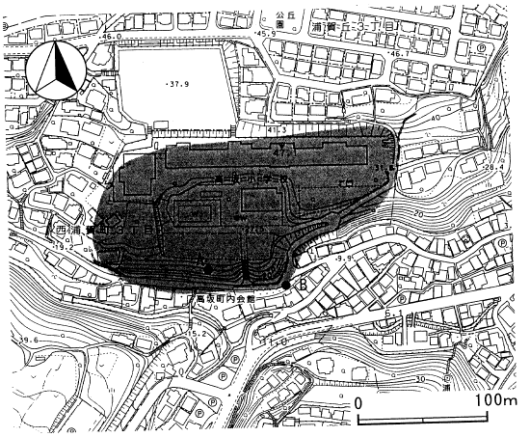
文化財調査報告　高坂貝塚

西浦賀所在の高坂貝塚の史跡指定に向け、その内容の再評価ならびに遺跡の残存状況等について調査を行った報告である。

1. 過去の調査および遺跡の地形とその残存状況

高坂貝塚は、西浦賀３－150－1、高坂小学校敷地に所在する（第１・２図）。



第１・２図　高坂貝塚の位置と地形

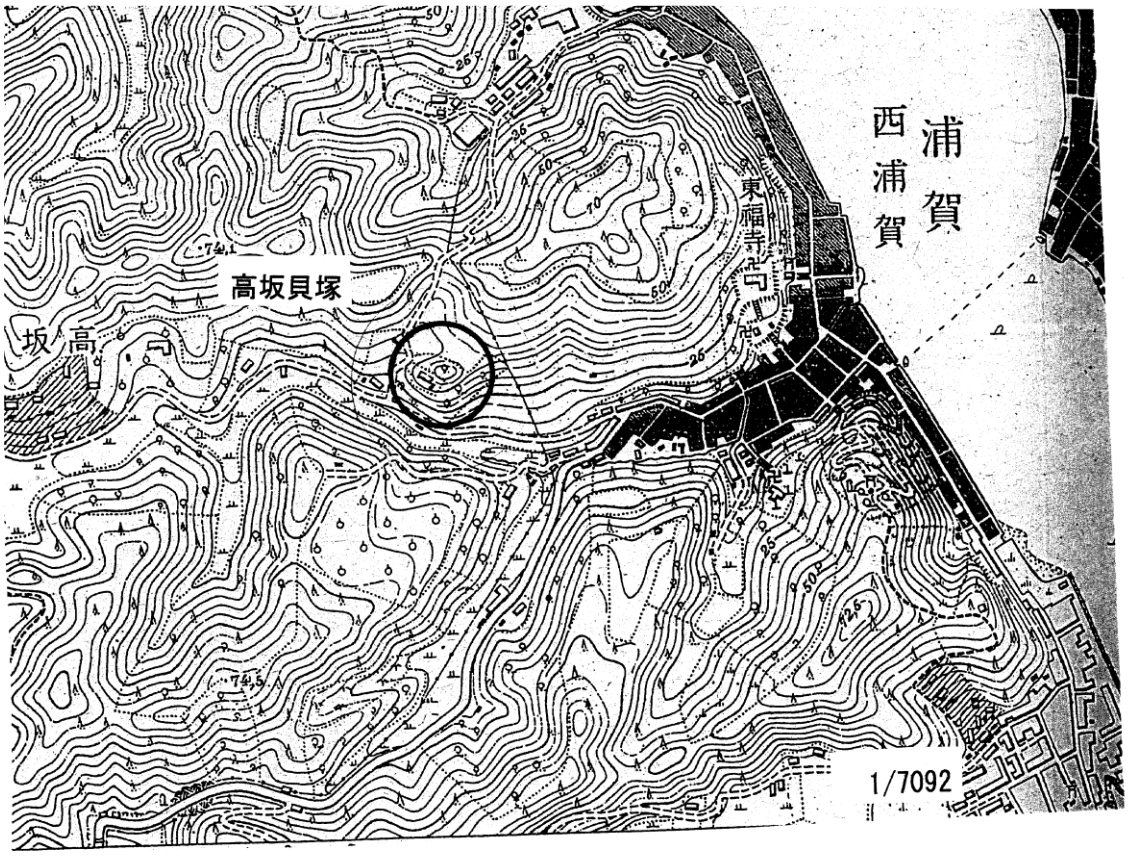
調査歴

最初の調査は大正６（1917）年、高坂小学校南側の道路の拡幅工事中に２体の人骨および土器・石器・骨角器類が出土し、知らせを受けた東京帝国大学人類学教室の小松真一・松村瞭が調査したもので（小松 1922）、この時の出土資料および人骨は東京大学総合研究博物館に所蔵されている。

大正 11（1922）年には、赤星直忠が小規模な発掘調査を行っているが、赤星はその後も継続してたびたび遺跡を訪れ採集を継続している（赤星ノート）。

昭和 60（1985）年、高坂小学校の南側道路の崖地対策工事により、貝塚の一部が露出し、縄文土器、石器が採集された。これを契機に、横須賀市自然・人文博物館が平成元（1989）年、発掘調査を実施し、校舎南の階段西側で良好な貝層の堆積を確認し、A 貝塚と名付けた。出土遺物などから、これが大正６年に人骨が２体出土した貝塚であろうと推定された（剱持・野内 1985）。崖地対策工事により発見されたものは、A 貝塚の東方 70m ほどの位置で、出土遺物の時期も異なることから B 貝塚とされた（第２図）。なお、岡本勇がかつて高坂小学校校門への登路の崖面に縄文時代前期の貝層を見ているとの話もあり、これも B 貝塚の一部の可能性がある。

遺跡の地形

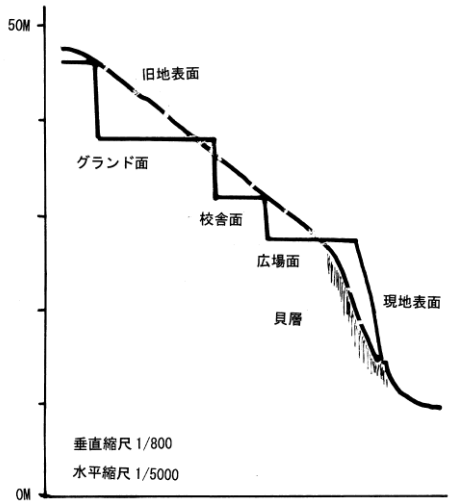


第３図　高坂貝塚の位置と地形（明治 42 年１万分の１地形図）

明治 41 年の１万分の１地図で見ると高坂小学校の位置する部分は東福寺浦の標高 70 数ｍの山から南西に伸びる尾根の先端部で、この先端部がやや高まりとなって標高 45ｍをやや超える高さの小山状をなしている（第３図）。小学校北側の住宅地の現在の標高が 45.9m であるところからみると、もともとのこの小山状の高まりは 46～47m であったものと推測される。この小山の北西および南東斜面はかなり急であるが、南側斜面はやや傾斜が緩い。

大正 14 年に、ここに小学校が建設されることになり、南側斜面は階段状に広範囲に削平され、グランウンド面、校舎面、広場面（いずれも仮称）が造成されたとみられる（大正 15 年開校）。工事状況の写真や赤星の記録などからみると、この階段状の造成によって削平された部分はかなり広範囲に及ぶとみられるが、斜面部の貝塚には削平はほとんど及んでいない。ただし、校門への登路および南に隣接する道路部分の崖面の下部は道路の造成により削られてしまっている。また、現況の南西側崖面では削平土を崖面に押し出して平坦面を造成しているため、崖面上部では埋土が厚く堆積している（第４図）。

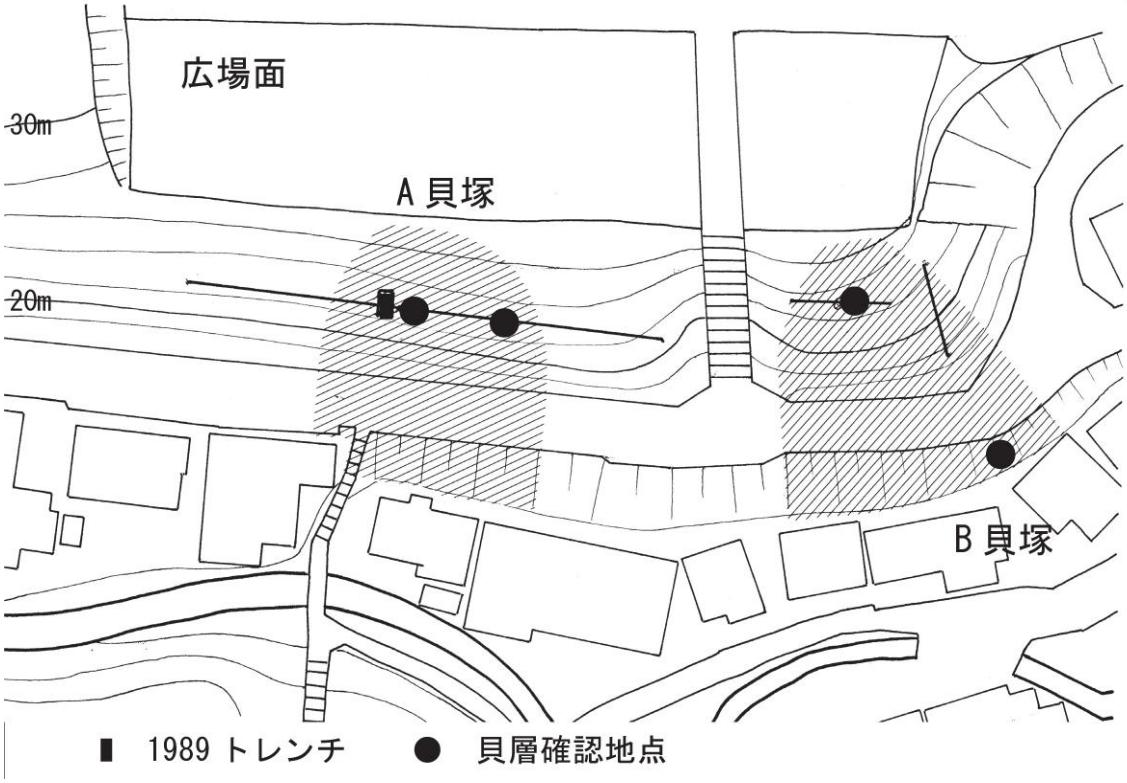
令和５年２月 27 日、28 日、文化財審議委員会の求めに応じて教育委員会により、南西側



第４図　高坂貝塚地形断面図（概念図）

斜面地の貝層と広場面の旧地形の残存状態の確認調査が行われた。A 貝塚部分では、広場への階段の西側の標高 23m 付近の斜面を適宜の間隔で約 30m にわたり検土杖による貝層確認を行った結果、階段から約 20m 地点と約 31m 地点の 2 ヶ所で貝層の残存を確認できた。B 貝塚部分では、崖地対策工事地点の直上の崖面の 23m 付近から 17m 付近にかけて同様の調査を行ったが貝層は確認できなかった。しかし、階段の東、約 9m 付近で露出している貝層を確認した。出土遺物からみて B 貝塚の一部と判断できるものと思われる（第５図）。

高坂貝塚は小学校および南側道路の工事などによりかなりの部分が失われているものの、少なくとも A・B2 地点の貝塚部分は残存しているほか、グランド面や校舎面付近でも南寄りの先端部分では縄文時代の包含層が残存している可能性があることが判明した（第４図）。結論的に言えば、縄文時代早期末から前期前半にかけての貝塚（B 貝塚）と縄文時代後期後半から晩期にかけての貝塚（A 貝塚）は、



第５図　高坂貝塚貝層分布図（概念図）

かなり良好な状態で残存していることを確認できた。また、校舎建設時に多くが失われたとみられる居住施設等が営まれた部分についても、まだその一部は残存している可能性が高いことも確認できた。

２．高坂貝塚出土の遺物

高坂貝塚の出土品は、現在、横須賀市自然・人文博物館および東京大学総合研究博物館に所蔵されている。横須賀市自然・人文博物館所蔵の資料は、博物館による調査時の出土資料および旧赤星収集資料である。

以下、横須賀市自然・人文博物館所蔵の B 貝塚・A 貝塚出土資料とそれ以外の順に概要を記す。東京大学総合研究博物館所蔵資料については別記する。

（Ｉ）Ｂ貝塚出土資料

道路の崖地対策工事時の採集品であることから量的にも少なく、出土位置等も必ずしも明確ではないという資料的限界を持つ。

土器

Ｂ貝塚では小破片を含めて 400 点が採集されており、このうち縄文時代早期末に位置づけられるものが 12%、縄文時代前期前葉から中葉のものが 87%である。

１）**縄文時代早期末に位置づけられる土器**

胎土に石英や長石の粒などを混じるとともに、植物繊維を含み、土器の内外に貝殻条痕ないしは擦痕が施されている。

下吉井式土器　図６－1～4

１・2 ともに半截竹管の押引文による沈線文が施されている。**1** の口縁は平縁を呈すると思われる。器面内面は横方向の貝殻条痕紋。**2** の内面は擦痕。**3** は丸底に近い底部。4 は、下吉井式に伴う無文土器。推定口径 13.8 ㎝、現在高 13.2 ㎝（おそらく 16 ㎝前後）の小形土器。

２）**縄文時代前期前葉から中葉に位置づけられる土器**

種々の縄文や撚糸文が施されている。

花積下層式土器　図６－5

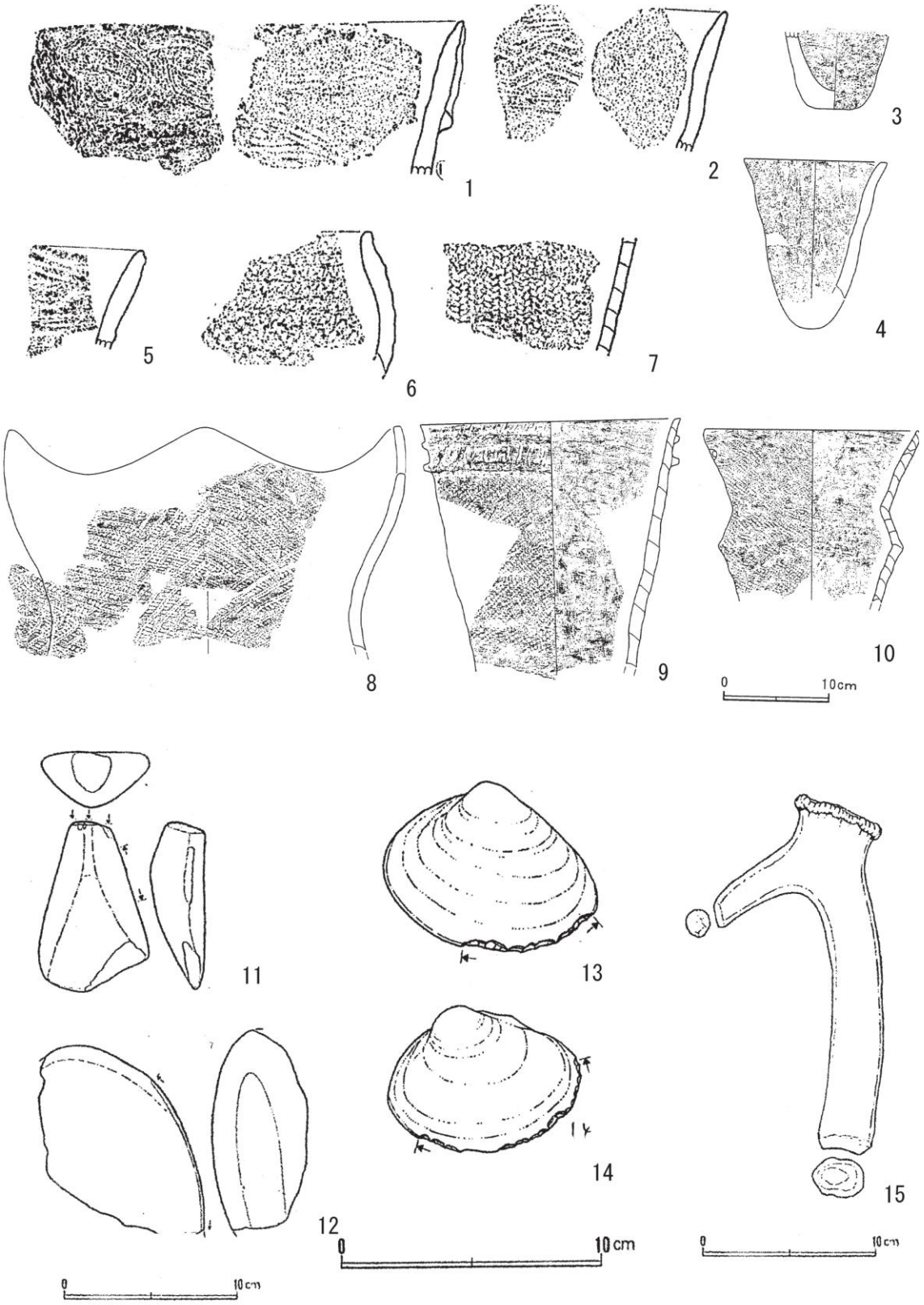
出土量はごく僅か。**5** は縄文原体の側面圧痕が施されている。

関山式土器　図６－6～７

出土量は少ない。**6** はループ文が多用されている。**7** は組紐縄文が施されている。

黒浜式土器　図６－8～10

Ｂ貝塚では主体をなす土器。**8** は付加縄文が施されている波状口縁の大形土器、口径は 37 ㎝程、遺存高 18.5 ㎝。**9** は隆帯文を持ったもので、隆帯間には半截竹管による従位沈線が充填されている。推定口径 24.8 ㎝、遺存高 24.1 ㎝。**10** は斜縄文が施されて



第６図　高坂Ｂ貝塚出土遺物

いる。推定口径 20.4 ㎝、遺存高 16.2 ㎝。

石器　図６－11・12

11 敲石　斑糲岩製　一端に敲打面がある。

12 磨石　安山岩製　側縁に使用痕が認められる。

骨角貝製品　図６－13～15

13 貝刃　チョウセンハマグリ左殻製　腹縁の中央部から後背縁の方向に剥離を加え刃としている。

14 貝刃　ハマグリ製？左殻。腹縁の約５分の４にわたって剥離を加えて刃としている。

15 落角の第３枝の下を輪切りにしたもの、第１枝の先端部を切り落としている。

動物遺体

軟体動物

腹足綱　イシダタミ・クボガイ・ヘソアキクボガイ・コシダカガンガラ・バテイラ・サザエ・スガイ・カコボラ・ツメタガイ・イボニシ・レイシ・アカニシ・テングニシ・ヒダリマキマイマイ。

二枚貝綱　カリガネエガイ・マガキ・ハマグリ・チョウセンハマグリ・アサリ・ミルクイ・マルサルボウ・コタマガイ？

マガキ：左殻 10・右殻 25 点、大きなもので殻高が 200 ㎜を超えるものもあるが 110～130 ㎜のものが多い。

チョウセンハマグリ：左殻 42・右殻 37 点、貝類の中では最も多く採集されている。殻長が 110～120 ㎜の大型のものが多い。

脊椎動物

硬骨魚綱　マダイ・クロダイ

哺乳綱　イヌ・イルカ科の一種・イノシシ・ニホンジカ

（２）Ａ貝塚出土資料

小規模な確認調査であることから資料数は少ないが、明確な記録を伴う本遺跡の出土資料である。

土器

Ａ貝塚では 97 点（接合・復元できたものは１として）の土器片があり、このうち縄文時代中期後葉に位置づけられる土器が 3 点、後期初頭のものが 10 点、後期中葉のものが 44 点、後期後葉から晩期初頭のものが 40 点である。

１）縄文時代後期初頭から前葉に位置づけられる土器。

称名寺式土器　図７－16

Ａ貝塚Ⅳｆgi 層出土。太い平行沈線文の間に縄文が施されている。

堀之内２式土器　図７－17

Ａ貝塚Ⅳｂ層出土。胴部が丸く張り、頸部で括れて口縁部が大きく外反する浅鉢の土器。

２）縄文時代後期中葉に位置づけられる土器

Ａ貝塚では比較的多く認められた。

加曾利Ｂ１式土器　図７－18・19

Ａ貝塚Ⅳa・Ⅳc 層出土。横帯文が施された区切文を持つ深鉢ないしは鉢形土器。

加曾利Ｂ２式土器　図７－20・21

Ａ貝塚Ⅳa 層出土。斜行縄文・矢羽根状沈線文が施されている深鉢形土器・鉢形土器。

加曾利Ｂ３式土器　図７－22

Ａ貝塚Ⅳｂ層出土。口縁部に斜行する沈線文が施されている。

曽谷式あるいは高井東式土器　図７－23

Ａ貝塚Ⅳｃ層出土。口縁部が「く」の字状に内湾する土器。屈曲した口縁部に単節の縄文を地文として、２条横位の平行沈線文が施されている。

３）縄文時代後期後葉から晩期初頭に位置づけられる土器

Ａ貝塚では主体となる土器である。

安行Ⅰ式土器　図７－24・25

24 はＡ貝塚Ⅳh 層出土。口縁部に帯状文、刻みのない縦長張り付け文を施し、器面が８分割され胴部に横位の弧状条線文が施されている。口径 28.9 ㎝・器高 32.4 ㎝、補修孔３ヶ所の深鉢形土器。**25** はＡ貝塚Ⅳｂ層出土。口縁部直下から４帯の帯状文が施され、縦長の貼付文を２段持ち、胴部には刻みを持つ平行沈線文が施され、以下縄文を充填した弧線文が描かれる。

安行Ⅱ式土器　図７－26

Ａ貝塚Ⅲ層出土。条線文が施された粗製深鉢形土器で、口縁部が強く内湾する。

安行Ⅲa 式土器　図７－27

Ａ貝塚Ⅲ層出土。太い沈線文が施される粗製深鉢形土器で、口縁部が強く湾曲する。

土製品

土器片錘　図７－28～32

最も重いもので 71.0ｇ、最も軽いもので 19.5ｇ。

石器　図７－33～35

33 打製石斧　砂岩製。

34 敲石　安山岩製　長軸の端部に敲打面がある。

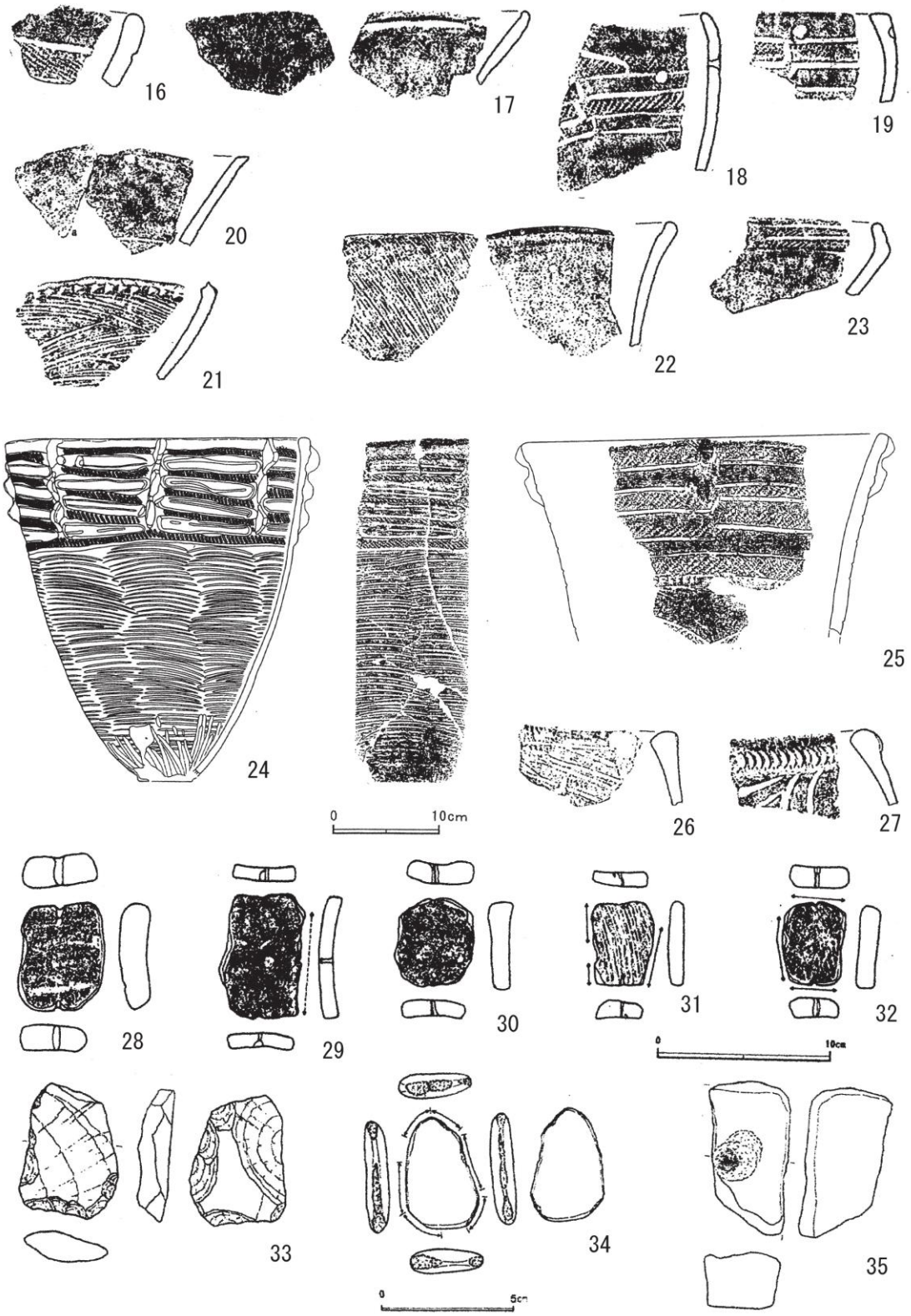
35 凹石　石灰岩製

骨角貝製品　図８－36～56

36 釣針　Ⅳh 層出土　鹿角製。軸頂・針先を欠損する。

37 刺突具　Ⅳｆｇｉ層　鹿角製。器体部のみ。

38 刺突具　Ⅳa 層　骨製。片側のみ。



第７図　高坂Ａ貝塚出土遺物（1）

39 鏃　Ⅳh 層　骨製。

40 加工痕のある鹿角　Ⅳç 層。

41 鏃　Ⅳe 層　イノシシの牙製。

42・43・44 鏃　Ⅳh 層　イノシシの牙製。

45 貝輪　Ⅳe 層　アカニシ製。未製品。

46・48・49 貝輪　Ⅳh 層　ベンケイガイ製。

47 貝輪　Ⅴ層　ベンケイガイ製。

50・53 貝輪　Ⅳe 層　ベンケイガイ製。

51 貝輪　Ⅳa 層　ベンケイガイ製。

52 貝輪　Ⅳfgi 層　ベンケイガイ製。

54 垂飾　Ⅳh 層　巻貝製。

55 垂飾　Ⅳç 層　ウノアシ製。

56 垂飾　Ⅳe 層　サメ歯製。

軟体動物

腹足綱　スガイ（76.24%）・クボガイ（5.72%）・コシダカガンガラ（3.33%）・イシダタミ（3.17%）・イボニシ（3.02%）。　※貝類全体（71772 点）での割合

二枚貝綱　主なものカリガネエガイ・アサリ・イガイ。

脊椎動物（数字はⅣ層での最小個体数）

軟骨魚綱　ネコザメ３・メジロザメ科の一種７・ツノザメ科の一種１・サメ目の一種２・トビエイ２・エイ目の一種６。

硬骨魚綱　マイワシ 10・カタクチイワシ４・ウツボ１・マアナゴ１・ボラ 13・スズキ 17・ハタ科の一種４・ブリ属の一種２・マアジ８・キダイ１・チダイ２・マダイ 32・クロダイ 19・タイ科の一種６・イシダイ３・コブダイ６・キュウセン属の一種３・サバ属の一種８・カツオ３・マグロ属の一種１・メバル２・フサカサゴ科の一種４・アイナメ２・コチ４・マガレイ１・カレイ科の一種・カワハギ 11・ハコフグ５。

両生綱　カエル目の一種２。

爬虫綱　ヘビ科の一種２。

鳥綱　ウミウ１・ガンカモ科の一種１。

哺乳綱　ニホンザル６・ノウサギ３・ネズミ科の一種３・マイルカ科の一種５・キツネ１・イヌ３・アナグマ１・アシカ１・イノシシ 10・ニホンジカ 11。

（３）旧赤星収集資料

大正 11 年の小発掘および長年にわたる同遺跡での採集品かと思われる（赤星ノートによれば、昭和 13 年の小発掘の記事まで幾度か高坂貝塚採集資料に触れている）。

土器

赤星資料では 146 点の縄文土器片があり、このうち早期末葉に位置づけられるものが 13 点、前期前葉から中葉のものが 42 点、前期後葉に位置のものが 1 点、中期前葉から中葉ものが 11 点、中期後葉のものが 29 点、後期前葉から中葉のものが 34 点、後期後葉のものが 6 点、その他の後期が 10 点である。

このうち A 貝塚・B 貝塚出土の中心的なものと異なる縄文時代前期後半及び中期の土器が注意される。赤星のメモからは、削平されて失われた遺跡部分からの採集品も多いと考えられることから、削平された校舎面部分に、縄文時代前期から中期の居住施設等が存在したことも考えられる。

1）縄文時代前期後半の竹管文土器群に位置づけられる土器

諸磯式土器　図８－57

2）縄文時代中期前葉から中葉に位置づけられる土器

勝坂式土器　図８－58

筒形をなす深鉢型土器、口縁部直下がやや肥厚しその下に２状の沈線が平行にめぐり、同部に隆起線文と沈線文によって渦巻状・波状の文様が施されている。

3）縄文時代中期後葉に位置づけられる土器

加曾利ＥⅣ式土器　図８－59

沈線文によって区画された文様が施されている。口径 23.2 ㎝、遺存高 16.3 ㎝の深鉢型深鉢型土器。

土偶の脚部　図８－60

遺存高 3.9 ㎝、脚幅 2.1 ㎝、脚長 2.5 ㎝。

石器　図８－61～63

61 打製石斧　斑糲岩製　短冊形を呈するもので、器面片面は礫面、両側面に剥離を加えるだけで、広く自然面をのこす。

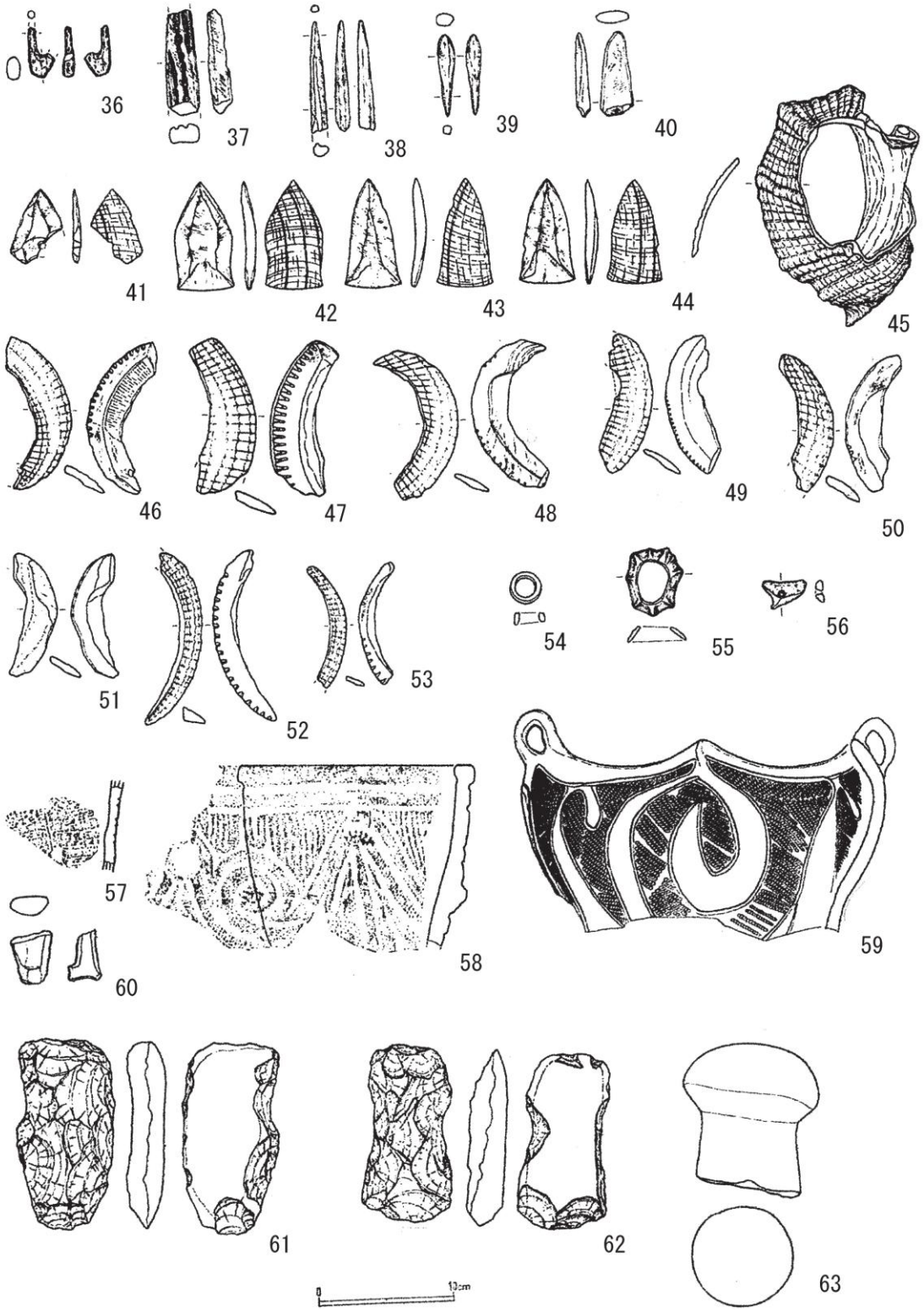
62 打製石斧　斑糲岩製、撥形。両側縁の括れ部作出のための部位に剥離を加え、広く自然面を残す。

63 石棒　安山岩製　頭部破片。

これらの石器は、その形態的特徴から、縄文時代中・後期の所産と考えられるものである。

（４）東京大学総合研究博物館所蔵資料

大正 6 年の道路工事に伴う採集品で、おそらく A 貝塚であろうとされるが（野内 2010）、小学校南側道路の拡幅工事に伴うとされていることから考えると、B 貝塚部分も工事対象域に入っていること、多様な土器の存在からみると、B 貝塚から出土したものを含むと考えるべきではなかろうかと思われる。



第８図　高坂Ａ貝塚出土遺物（2）・赤星資料

人骨については、工事関係者からの聞き取りから屈葬されていたものである可能性が高いと思われる（小松　1922）。

土器

下吉井式土器・花積下層式土器・黒浜式土器・曽利式土器・加曾利Ｅ式土器・安行式土器などが確認された（第 9・10 図）。

骨角器

擦切り痕のあるニホンジカの中手又は中足骨。

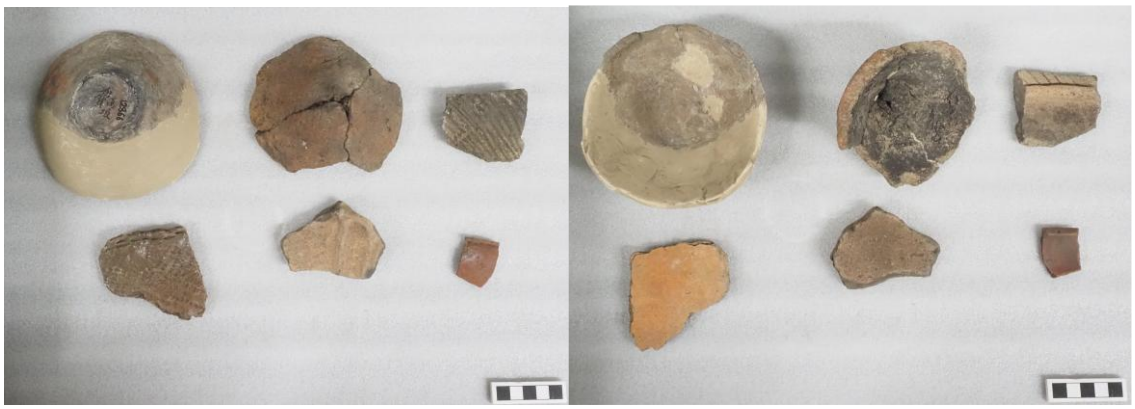
動物遺体

硬骨魚綱：コブダイ・クロダイ

哺乳綱：イルカ類・クジラ類・アシカ・イノシシ・ニホンジカ

ヒト　壮年女性・熟年女性各 1 体。

※以上の他、ニホンジカ製の**鍬形角器**が 4 点報告されているが、2025 年 9 月 25 日の調査では確認できていない。



左上　安行式土器　中央上　下吉井式土器

第 9・10 図　高坂貝塚出土の土器　外面・内面（東大所蔵）

3. 高坂貝塚の評価

1）遺跡としての残存状況

大正期の小学校建設や道路整備、昭和期の崖地対策工事などにより、高坂遺跡のかなりの部分が失われていることは事実であるが、A 貝塚は下部の一部が道路整備事業によって壊されているものの、斜面上部の貝層は良好に残存していることが市博物館の調査で確認されていた。この点は、今回の確認調査でも追検証された。B 貝塚とされた部分は擁壁工事で若干削られたとはいえ、現状でも道路下に埋没していると判断される。今回の確認調査では、新たに斜面上部に貝層の存剤を確認した。以上のことから、高坂貝塚の斜面部の貝層は、一部が破壊されてはいるものの、ほぼ良好な状態で残存しているものと考えられる。

また、校舎面およびグランド面も、その先端部分は余り深くまでは削平されていない模

様で、斜面部に貝塚を遺した人々の生活痕跡が残存している可能性があると判断される。さらに、赤星の採集資料からみると、この部分には縄文時代中期から後期前半期の生活痕跡が残存している可能性も考えられる。

２）湾口部の貝塚としての特異性

高坂貝塚は東京湾口に位置する貝塚である。東京湾内や相模湾岸の貝塚とは、海域環境に違いがあることを反映して、魚介類の種構成に特異性が認められる。B 貝塚では、チョウセンハマグリが卓越するなどの点で、半島の他の貝塚とは明確に異なる特徴を示している。この点は、海域環境の差によるものでもあるが、一方で、陸獣に関しても半島の多くの貝塚でイノシシが多出するのに対しシカが少ない傾向にあるのとは反対の状況がうかがえることも重要で、これら捕獲動物種の変化が当該期の大きな気候変動と関わることも考慮される必要がある。縄文早・前期の海洋適応文化の実態を知るためにも、本貝塚は重要な意味を持つということができる。

３）半島域での縄文時代後・晩期の貝塚として希少性

三浦半島域では、縄文時代早期から連綿と貝塚が営まれているが、縄文時代後期後半期以降は、その数が減少する。そうした中で高坂貝塚は後期後半から晩期に至るまで継続する、ほとんど唯一の貝塚である。他に例を見ない希少な遺跡で、半島域での縄文時代最終末期を考えるうえで欠くことのできない遺跡である。

４）まとめ

上記１）～3）の理由とその評価に立脚すれば、本遺跡を市指定史跡として保存することが望ましいといえる。

文献

剱持輝久・野内秀明　1985　高坂貝塚の研究（Ⅰ）　横須賀市博物館研究報告（人文科学）29　1－22　横須賀市人文博物館

小松真一　1922　相模浦賀町貝塚の石器時代人骨　人類学雑誌 37-5　159－160　東京人類学会

野内秀明　2010　高坂貝塚　横須賀市史　別編・考古　421－431　横須賀市

（文責：矢島國雄・剱持輝久）

（2026 年 1 月 19 日）